

クォータースターコンテスト用

睡眠代行業、致します

(演劇版)

作 大岡俊彦

登場人物表

吉田 (28) うだつのあがらない居眠り

名人。サラリーマン。

ヒトミ (27) 吉田の思い人。隣の席。

大山崎 (28) 吉田の同期でエリート。

悪魔 全身赤い。

※ 四つのシーンがある。四つの舞台の真ん中にカメラがあり、シーンの変更を、カメラのパンで表現。
黒バックに机と椅子程度の、シンプルな舞台装置で四つの場所を表現する。

どこか

会社 カメラ 自宅 のような位置関係。

電車

○会社

黒バックにビジネス机二つ。

席で居眠りをする吉田(28)。

隣の席のヒトミ(27)が起こそうと。

ヒトミ「吉田くん！ 吉田くん！ 居眠り、

見つかるよ！ 吉田くん！」

吉田「(起きる)ん？ 何？」

ヒトミ「居眠りばかりじゃ、また部長に怒られるわよ。(物真似をして)『大山崎君のように成績を上げられないのかね』って嫌味言われるわよ」

吉田「どうせオレは万年窓際だろ。それより、寝起きに君の顔があつて俺は幸せ！」
ヒトミ「(聞いてない)あ、大山崎さん、お疲れ様です」

大山崎(28)が営業から帰ってきた。

大山崎「いやあ参った参った」

ヒトミ「何かあったんですか？」

吉田「参った参った。二件も新規契約取つてきちやった」

ヒトミ「マジですか！ この会社の救世主じゃないですか！ 今すぐお茶入れますね！」

大山崎「じゃ俺はヒトミちゃんのお茶入れたげる」

ヒトミ「いいですよお」

大山崎「まあまあまあ」

二人、テンション高くはける。

吉田、一人残されてあくび。

吉田「どうせ俺は居眠り営業さ。誰からも呼ばれない。誰からも必要とされていない。五時半まで寝てすごして、家に帰ってまた寝るだけ」

時計を見る。かばんを持って、退社。

○電車内

黒バックに長椅子のみ。車内S E。

大いびきをかきながら眠る吉田。

時々体がビクンってなる。
そこへ悪魔が入ってくる。

悪魔 「ここが人間界の満員電車というものか。しかし人間はバカだねえ。こんな狭い箱に乗って何が楽しいんだか」

体がビクンってなって目を覚ます吉田。
悪魔と目が合う。

悪魔 「うわっ！」

とびつくりするが、何事もなかったの
ように歩き出そうと。

吉田 「お前、何？」

悪魔、ぴたりと止まる。

吉田 「お前だよ、お前」

悪魔 「：見えてるんですか？」

吉田 「見えてるっていうか、ついでに話して
るけど」

悪魔 「しまった！ しまったしまったしま
った！」

吉田 「？」

悪魔 「人間に見られてしまったあ！」

吉田 「？？」

悪魔 「：しようがない。これは大魔王様には
内緒だぞ。特別にお前と契約を結んでや
るから、内緒にしてくださいませんか」

吉田 「：何のこと？」

悪魔 「俺様は、悪魔なんです」

吉田 「悪魔？」

悪魔 「：見たところ、お前様は生ける屍の
ようですね。生きる希望もなく、ただダラ
ダラと生きているだけです」

吉田 「なんで分るんだ」

悪魔 「悪魔ですから」

悪魔 「魂と引き換えに、お前様に凄い能力
を授けます」

吉田 「：悪魔の力？」

悪魔 「いいえ。お前様、寝るのが好きでし
よう」

吉田 「うん。いつも寝てる」

悪魔 「他人の代わりに寝る能力はどう？」

吉田 「？」

悪魔 「お前様が寝ると、誰かの代わりに寝れる能力。誰かの代わりに寝て、金を貰う商売をはじめるといい」

吉田 「寝ただけで、金が貰えるって？」

悪魔 「イグザクトリイ。指きりで契約です」
小指を出す。

悪魔 「どうせ居眠りばかりしてる人生なら、それで金儲けすりゃいいんですよ」

吉田 「そりゃあいい話だけど。本当？」

悪魔 「嘘だったとしても、金返せば丸くおさまるでしょう？ お前様にリスクはない」

吉田 「…まあいいや（と小指を出す）」

悪魔、指切りをする。

悪魔 「はい。契約成立。姿を見られたのは、内緒で宜しくです」

○会社、翌日

隣の席のヒトミが、眠そうにあくび。

吉田 「眠そうだね」

ヒトミ 「ちよつと徹夜しちゃって」

吉田 「珍しい」

ヒトミ 「ペルセウス座流星群を見に行ったの」

吉田 「一人で？」

ヒトミ 「みんなだよ（あくびが止まらない）」

吉田 「…あかさ。代わりに寝てあげるよ」

ヒトミ 「ハイ？」

吉田 「…俺、実はそういう超能力があるんだ」

ヒトミ 「ハイ？」

吉田 「代わりに俺が寝て、スッキリしたら五百円でどう？」

ヒトミ 「ホントに眠気が取れるなら、一万円でも三万円でも払うわよ」

吉田 「よし。値段は出来高だ。ちよつと寝るわ」

吉田、席で寝始める。ヒトミ、席を立ち、書類を持っていったんはける。

ヒトミ、戻ってくる。
気配に吉田起きる。

吉田 「どう？」

ヒトミ 「さっきまで超眠かったのが嘘みたい！
熟睡したみたいに爽快なの！」

財布から三万円出して渡す。

吉田 「え、いいよ」

ヒトミ 「いいのよ。その価値があるもの。またお願いね」

はける。

吉田、その後姿を見送り、三万円をポケットにしまう。

しばらく考え、立つ。

吉田 「誰か。眠いやついない？」
とはける。

ヒトミと大山崎が入ってくる。

大山崎 「嘘だろ？ 代わりに寝てくれるって
どんな超能力だよ」

ヒトミ 「マッサージとかより全然スツキリするのよ。不思議なの。気功みたいなもんかも知れないし」

大山崎 「あれ？ いないよ？」

そこへ、現金三十万を両手に吉田が帰ってくる。

ヒトミ 「吉田くん。大山崎さんが力を借りた
いって」

吉田 「睡眠代行業、致します。一時間一万
円。何時間御望みで」

大山崎 「：試しに、サンパ、二十四時間分」

吉田 「ほう。毎度あり。しかしえらくガツ
ツリだね」

大山崎 「デカイプレゼンが控えてるんだ。勝
てば十億。徹夜作業は目に見えてる。どう
せ寝れねえんだ。もし代わりに寝てくれる
つてのが本当なら、すげえ助かる」

吉田 「我が社の為だ。一肌脱ごう。いや、
一眠りしてやろうといったところか」

大山崎、懐から財布を出し、

大山崎 「前金制？」

吉田 「後金制。じゃ早速早退して、三日有

給とるわ」

暗転。

明転。

出勤してきた吉田に、大山崎が。

大山崎「おはようっ！」

吉田「ああ。おはよう。どうだった？」

大山崎「全然眠くならなかったよ！　すげえ

よ吉田！　すげえよ睡眠代行！　プレゼン

も大成功だし、これ、はずむよ！」

と、百万円の入った封筒。

吉田「お。おう。：流石我が社のエース」

大山崎「またなんかあったら頼むよ！　おかげで今日のデートもハッスル出来るぜ！」

吉田「ハッスルって」

○どこか

街のどこか。黒バックのみ。

歩いている吉田、立ち止まる。物陰に

隠れる。

大山崎とヒトミが腕を組んで、イチャ

イチャしながら入ってくる。

大山崎「俺寝てねえし！　その分吉田が寝た

し！　その余力で、今夜もハッスル！」

ヒトミ、笑う。

二人は隠れた吉田に気づかず、通り過

ぎる。

吉田「ペルセウス座流星群は、大山崎と見

たのか？」

吉田、開き直る。

吉田「どなたか！　眠い人はいませんか！

睡眠代行業、致します！」

○会社

居眠りを続ける吉田。

ヒトミが隣で仕事中。

大山崎が入ってくる。

大山崎「どう？」

ヒトミ「まだ起きないの。随分と仕事請け負

って来たみたい」

と、吉田、起きる。

大山崎「おう」

ヒトミ「おはよう」

吉田「…」

吉田、二人を交互に見て、走って逃げる。

○どこか

吉田、一人芝居で。

吉田「どなたか！ 眠い人はいませんか！ 睡眠代行業致します！ あ、ありがとうございます。十時間分。あ、ありがとうございます。三十時間分。もっと！ もっと！ もっと寝ますよ！ え？ 大量の睡眠不足集団がいる？ どれだけ？ 百人！ 行きましょう！ どこですか？ ブラック企業？ ITの下請け？ …ほう、映画の撮影現場！」

暗転。

○吉田の自宅

黒バックに布団のみ。

目覚める吉田。のびをする。

横に悪魔が正座しているのに気づき、びっくりする。

吉田「何だよびっくりした」

悪魔「迎えに、来ましたぜ」

吉田「…はあ？」

悪魔「お前様の、寿命の時が来たんです」

吉田「…はあ？」

悪魔「今日はお前様の寿命の日です。お前様は、それまでぐっすりと寝てらしていたのです」

吉田、起きようとするが体が動かない。

吉田「なんだよ。体が動かかねえよ」

悪魔「当たり前でしょ。その体、87歳だから」

吉田 「…そんな馬鹿な」
必死で起き、窓の外を見る。
吉田 「なんだこれ。まるで未来都市じゃないか！」
悪魔 「お前様のおかげで、みんな寝ずに働いて、今日の日本の繁栄の基礎となったのです」
吉田 「…ホントに俺はずっと寝てたのか？」
悪魔 「魂をもらうって契約でしょう？ 寿命の日まで待ってやってたんですぜ」
吉田 「ちよっと待ってちよっと待って。ヒトミちゃんと大山崎はどうなった」
悪魔 「結婚して、去年に二人とも死んだね。子供は出来なかったです」
吉田 「会社は？」
悪魔 「大山崎が大きくして、重役になって、三倍ぐらい大きくなったんじゃないですかねえ」
吉田 「…その間、なんで俺を誰も起こさないんだ」
悪魔 「さあて。誰も起こしにこなかっただけですよ。必要とされなかったから」
吉田 「……………」
悪魔 「じゃ、いよいよ魂を貰いましょうか」
吉田 「…お前、誰だ」
悪魔 「嫌だなあ。悪魔ですよ。今更ばつくれるつもりですか？」
吉田 「本当にそんな契約したっけ？」
悪魔 「したに決まってるでしょ。あの電車の中で」
と指きりのまねを。
吉田 「…よく覚えてないな。その場面の所に、連れてつてくれ」
悪魔 「はあ？」
吉田 「悪魔なら出来るだろ。目の前で二人が契約してる所見たら思い出すだろ。じゃないと、魔王に言うぞ」
悪魔 「分りました分りました」
吉田 「俺たち、どうやって出会ったんだっけ？」

○電車内

寝ている過去の吉田（バックシヨットで、身代わりの役者）。いびきをかいて、時々ビクンってなってる。

そこへ吉田と悪魔がやってくる。

吉田 「おう。俺がうつらうつらしているわ」

悪魔 「このあと私が人間界にやって来てです。夢うつつの人間には悪魔が見えるんですよ。それで姿を見られたんですよ」

吉田 「まだこいつは、夢うつつと言っ訳か」
悪魔 「左様で」

吉田、寝てる過去の吉田の頭を思い切りはたく。

過去の吉田、びっくりして起きる。

悪魔 「ちよつと！ そんなことしたらこいつが起きちやって、このあと来る私に出会わなくて、…そうしたら歴史が変わって、我々は消えてしまうじゃないですか！」

吉田 「（過去の吉田の耳元に）目を覚ませ。寝てる場合じゃない」

吉田と悪魔、闇に消える。

過去の吉田、背伸びをする。
暗転。